



カテゴリー: 未分類 パーマリンク

仙台の紅葉—水沼さんからの便り

投稿日: 2018年11月12日 作成者: takeuchi

武内清先生

稻毛海浜公園から沈む夕日を見る幼い兄弟、すばらしい写真です。

この夕日を彼らはどう見たのか、生涯に残る記憶になるかもしれません。

私も子どもの頃に見た夕日と黄昏はくっきりと脳裏に残っています。

北海道に勤務していた時、道南の瀬棚という日本海に面した町で、ゆらゆらと沈んでいく橙色の夕日もまた忘れられない光景です。

人は拍手を打って朝日を拝みます。これは太陽や自然に対する畏敬の念から来るものです。

夕日や茜色の夕焼けは皆な黙って見ているだけです。

仏教では西は死の世界であり、いつかは死んでしまう自分と西方浄土に行ったしまった人々を切ない気持ちで思い出すからだと思います。

蔵王や栗駒が冠雪し、いよいよ仙台も冬到来です。

家の近くの山林の紅葉の写真を添付します。

(水沼文平)

仙台からの便り

投稿日: 2016年8月7日 作成者: takeuchi

先月に「財団法人中央教育研究所」を定年で退職され、故郷の仙台に戻られた水沼文平さんから近況報告が届いた。相変わらず、骨のあるまた文学教養に充ちた報告である。ご了解を得て、掲載させていただく。

近況報告です。

新居に沿った県道263号線を6キロほど北上した泉区に宮城県立図書館や仙台泉プレミアムアウトレットがあります。友人の車で案内してもらいましたが、雑木林に囲まれた図書館はガラス張りのモダンな建物で書籍はもちろん郷土資料も充実していました。またアウトレットは多様な店舗があり老若男女でぎわっていました。50年前は旧七北田村で山林や田畠があったところです。この大きな変化に驚いています。

今日の午前中、同じ友人の誘いで「仙台七夕祭り」を見てきました。店ごとの七夕飾りは画一的な吹き流しが主で、昔はたくさんあった「からくり」もほとんど見当たりませんでした。

5月の「青葉祭り」は伊達政宗の命日に由来する青葉神社の祭礼ですが、本来の意味を失い、スズメ踊りや何とか山車など、わあわあ騒ぐだけのものになっているようです。七夕も同様、短冊に願いごとを書くことは幼稚園や小学校だけの行事になっていると思われます。

お祭り騒ぎもけっこうですが、子どもたちの将来のために盛岡の「先人記念館」のようなものを作りたいものです。何人か偉人を上げて見ますが、大槻玄沢（蘭方医）、吉野作造（思想家）、井上成美（軍人）、佐藤忠良（彫刻家）、千葉周作（剣術家）、土井晩翠（詩人）、支倉常長（慶長遣欧使節）、林子平（経世論家）、原阿佐緒（歌人）、志賀潔（細菌学者）などの優れた人々を宮城県は生んでいます。

七夕を見物中、私が50年前に卒業した高校に属する生徒にチラシを渡されました。そのチラシは偏差値の高い何校かの「ナンバースクール文化祭」を案内するもので、エリート意識から来るのか「ナンバースクール」と明記する無神経さ・精神性の軽さ（謙譲心・思いやりの欠如）に変貌した七夕祭り、青葉祭り同様の失望を感じました。

このような変貌（変容）は多分全国的な傾向だと思いますが、この近況報告は長年故郷を離れ、故郷に幻想を持ち続けた今浦島の「たわごと」として受け止めていただければ幸いです。（水沼文平）

カテゴリー: 未分類 パーマリンク

お彼岸に因んで 水沼文平

投稿日: 2018年3月18日 作成者: takeuchi

仙台ではクロッカスが咲き始め、コブシやスイセンの蕾が綻んできました。

今日3月18日は彼岸の入り、21日が中日、24日が明けとなります。昨日17日の仙台の日の出は5時46分、日の入は17時46分で、真東から太陽が昇り真西に沈みました。英語で言う“Spring Equinox Day”です。

子どもの頃に聞いた里謡に「盆々と待っていた盆がただ三日、いらざる彼岸が七日ある」というものがありました。昔の丁稚奉公は、盆と正月しか休みがなかったので、盆と同じく先祖を祭る春・秋の彼岸が七日もあるのに休めないことが恨めしかったようです。

現在は「春分の日」「秋分の日」「元旦」が国民の休日になっていますが、「盆の中日」が休日でないのはどうしてでしょうか。

盆と彼岸の由来に関してネットにいろいろと記載されています。

共に先祖供養であることは理解していますが、むりやり我流に解釈すれば、盆の中日の8月15日は終戦記念日、戦争で亡くなつて300万人の日本人がやっと平和になった日本を見るために戻つてくる日、

彼岸は太陽（現世の象徴？）が極楽浄土のある真西に沈み「あの世」を最も近くで見ることができる日なので、このまたとないチャンスに先祖と間近に会うことができる墓に出向くという解釈でどうでしょう。

仙台の春の彼岸は花屋の店頭にコシアブラの木を削って作った赤や黄の「削り花」が並びます。春の彼岸に生花がなかつた北国の知恵だと思います。

彼岸に因んで“Today is very good day to die”という詩をご紹介します。これはナンシー・ウッドがタオス・プロの老インディアンから聞いてものを詩の形にしたもの（対訳は金関寿夫）。北アジアを起源としベーリング海峡を渡つたインディアンは顔が日本人そっくりな上、同じ蒙古斑を持ち、死生観や生き方に類似点が見れます。

Today is a very good day to die.

Every Living thing is in harmony with me.

Every voice sings a chorus within me.

All beauty has come to rest in my eyes.

All bad thoughts have departed from me.

Today is a very good day to die.

My land is peaceful around me.

My fields have been turned for the last time.

My house is filled with laughter.

My children have come home.

Yes, today is a very good day to die.

今日は死ぬのにもってこいの日だ。

生きているものすべてが、私と呼吸を合わせている。

すべての声が、わたしの中で合唱している。.

すべての美が、わたしの目の中で休もうとしてやって来た。

あらゆる悪い考えは、わたしから立ち去つていった。

今日は死ぬのにもってこいの日だ。

わたしの土地は、わたしを取り巻いている。

わたしの烟は、もう耕されることはない。

わたしの家は、笑い声に満ちている。

子どもたちは、うちに帰ってきた。

そう、今日は死ぬのにもってこいの日だ。

「自転車に乗って」 水沼文平

投稿日: 2018年5月29日 作成者: takeuchi

仙台に居を移してから思い出の場所を車で走り回った。そして去年の暮、自転車（電動アシスト）を購入した。最初は車の通らない近くの道で練習をした。まっすぐ走れない、ふらつく、側溝に落ちそうになり急ブレーキを掛けた。

自転車との出会いは4,5才に遡る。父が乗る自転車の三角形のフレームの上辺に座布団を巻き付け、それに跨り、ハンドルを必死になって握りしている幼い自分の記憶が残っている。小学生の頃（昭和30年前後）はまだ子供用の自転車はなく（都会ではあったのかも知れない）大人の自転車に「三角乗り」をした。この三角乗りとは前述したフレームの三角形の中に右足を入れて、ペダルを半回転させながら進む乗り方である。少し背が伸びるとサドルに腰かけて足が届かないままペダルを蹴りながら放課後の校庭を走り回った。中学校に入ってから自転車を買ってもらい、その自転車で高校三年まで通学した。その頃の仙台は交通量も少なく手放し運転でかっこよさを競ったものである。その後は現在に至るまで時たま自転車に乗ることはあっても自家用は持たなかった。

少年時代は全く意識しないで乗っていたが、この年になって再度挑戦してみると、自転車乗りとは単に両足でペダルを漕ぎ両手でハンドルを操作するのではなく全身でバランスをとりながら運転していることが分かった。

車と異なり自転車の良いところはゆっくり走れるので家々の庭や路傍の花がよく見えることである。自転車を止め白いオオデマリの花に見とれているとその家の人に話しかけられたりする。自慢の花なのだろう。

家から5kmの街中の書店や銀行、10kmの根白石の政宗のお祖母ちゃん（久保姫）のお墓、15kmの宮床にある原阿佐緒（歌人）記念館を訪ねたりしている。目に沁みる青葉若葉の中を五月の薰風を受けながら走る爽快さは何にも例えようがない。

早朝、家の中で勝手体操をしているが屈伸運動をしていても体のぶれがなくなった。

最近はほとんど毎日自転車で走り回っていて、両手（時々片手）と右足だけで運転する車にはあまり乗らなくなつた。

90才の女性が運転する車が起こした死亡事故のニュースがあった。事故の原因は専門家に任せるが、体力の衰えやふらつきなどの自覚症状がある高齢者には、体力を強化し、とっさの判断力と平衡感覚を養い、さらには可憐な花たちが発見できる「自転車乗り」をぜひお勧めしたい。

カテゴリー: 未分類 [パーマリンク](#)

「年頭に思ったこと」 水沼文平

投稿日: 2019年1月4日 作成者: takeuchi

仙台在住の水沼さんより格調の高い年頭所感をいただいた。掲載させていただく。

武内清先生。

明けましておめでとうございます。今年も宜しくお願ひいたします。卓球、テニスで健康を維持し、楽しくお過ごしください。

私も自転車、水泳、石段登りに精を出したいと思っています。以下、思うがままの年頭所感です。（水沼）

<その一>2日の未明、宝くじで10億円が当たった夢をみた。年末に東二番丁の宝くじ売り場の長蛇の列が夢のベースになったのかも知れない。10億円という途方もない金額に唖然としながら何に使うか、何を買おうかと思案し、アフリカの子どものことがチラッと頭に浮かんだが、行きついた結論は「5段変速の自転車」を買うことであった。現在、電動アシストに乗っているが男子として気後れを感じていた。10億円の使い道は私にとってはこの程度である。

<その二>2日の10時頃、4車線の交差点で女性が運転する軽自動車の側面に男性のセダンがぶつかったのを目撃した。男性の信号無視が原因である。両者とも老人で幸い大きな怪我はなかったようだが女性はショックからか運転席に座ったまま動かなかつた。スーパーの駐車場で運転席からよろよろと出てきて杖をついている老人をよく見かける。行政は老人の運転免許証の返納を盛んに勧め、優遇措置として市営、県営バスも割引や指定タクシー業者による運賃10%割引などの措置を講じている。80才で運転している知人に聞くと「確かに視力やとっさの判断力に衰えを感じ、運転に自信をなくしている」と本音を漏らした。さらには坂の多い団地は人口減少に伴い商店がなくなり遠くのスーパーまで行かないと買い物ができなくなったとも語っている。仙台市近郊の団地は昭和40年代に山林を崩して造成され、坂道が多く、子や孫は遠くに住み、三軒に一軒は空き家となっている。地方自治体は高齢者に対してタクシーの10%割引などてお茶を濁すのではなく、初乗り100円タクシーの配備や、貧困老世帯に無料の食事を提供するなどの抜本的な改革を望みたい。

<その三>2日の午後から母校柔道部の初稽古を見学した。部員は3名（女子1名は欠席）に私と同年輩のOBが3名、礼に始まり「打ち込み」（型の練習）、「乱取り」（自由練習）と進み、最後にOBが個々の得意技に対する指導に当たった。私も体がムズムズてきて「受け身」の練習をした。私たちの頃、部員は50名近くいたが、部員減少に関してOBに聞いたら中学校の体育で柔道が選択必修になっているが希望者が少なく、またクラブ活動としての柔道も指導者不足で設置していない学校が多くなったという。怪我を心配する保護者、特に母親の懸念も背景にあるようだ。武闘には怪我が付きもの、打撲や捻挫は日常茶飯事、サポーター代わりに自転車のタイヤのチューブを巻いて痛みに耐え練習に励んだものであるが、過保護も一因となっていると聞いて「さもあらん」とすぐに納得がいった。

<その四>今年は新しい天皇が誕生する。今生天皇の意思に基づく退位に関して「天皇退位特例法」が交付され、さらに天皇は土葬から火葬、葬儀の行事の簡素化の希望を述べている。また天皇の代替わりに伴う皇室行事「大嘗祭（だいじょうさい）」への公費支出について、秋篠宮が天皇家の私費で賄うという具体案を示した。歴史上、天

皇が生前に位を譲ったケースが多く、女帝問題も含めて検討されるべきである。また秋篠宮の提案の背景には、天皇が亡くなると殯（もがり）と云った行事が延々と続き人的にも経済的にも大きな負担がかかることがあると思われる。天皇家では、経済格差が大きくなっている現在、朝ご飯が食べられない子ども、年金では生活できない困窮老人の救済なども念頭に置いているのかも知れない。

＜その五＞昨年の11月から息切れ対策として「肺周り筋トレ」を朝夕実践し、近所の公園の石段登りも開始した。最初は32段×5往復（160段）だったが、現在は13往復（416段）までできるようになった。尤も休み休みではあるが、以前とは異なる自分を実感している。自転車で走り回っていても階段を見るとつい登りたくなるという奇病に取りつかれている。今年の目標として山形の立石寺（芭蕉の「閑さや岩に・・・・」）の山口から山門を経て五大堂に至る石段1070段に挑戦したいと思う。

水沼文平

カテゴリー: [未分類](#) [パーマリンク](#)

教養について

投稿日: 2017年8月11日 作成者: [takeuchi](#)

読み返し、最初に読んだ時の感動を思い出したり、その時の心の安定や癒しを再現したくなる愛読書は誰もあるのかもしれない。仙台にいる水沼文平さんから、下記のメールをいただいた。

＜村上春樹の「やがて哀しき外国語」は好きな本のひとつで私も読み返したことがあります。読み返しで一番は司馬遼太郎の「街道をゆくシリーズ」です。読んでいると精神が安定し、トランキライザーの役割も果たしてくれます。

来週、津軽の旅に出ます。太宰の足跡を訪ね、岩木山をいろんな角度から眺め、津軽三味線を聞き、そして十三湖と竜飛岬を見たいと思っています。＞

私の場合、水沼さんほど教養の幅や深さがなく、司馬遼太郎や太宰治まで射程が広がっていない。若い頃は、夏目漱石や古井由吉の小説や江藤淳の評論をよく繰り返し読み、精神の安定を図った。人それぞれ、そのような精神の安定剤をもっていることであろう。読む本によって、その人の教養が知れてしまう。

同じような役割を果たす映画というものがあるのだろうか。同じ映画を繰り返し見ることはどのくらいあるのであろうか。これも人によるのであろうが、私の場合あまりない。好きな監督（たとえば、ヴィスコンティ、マイケル・チミノ、黒沢明など）の映画は時々見たいなとか、ジブリの映画は何度か繰り返しありたいなと思う程度である。

音楽好きの人にとっては、同じ曲、同じ演奏家の演奏や歌を聴き、心の高揚や癒しをはかっている人がいることであろう。昔友人から、落ち込んだ時はグールドのピアノ演奏（確かモーツアルトの曲だと思うが）を聞くという話を聞き、私と教養が違うなと感心したことがある（彼から、グールドのレコードを1枚プレゼントされたことがある）。江藤淳や村上春樹のエッセイを読んでも、クラシックやジャズの音楽や演奏に関する記述が多い。私の場合、そのような音楽の教養やセンスがない。

カテゴリー: [未分類](#) [パーマリンク](#)

河口湖合宿研究報告1 企業内教育と学校教育について

投稿日: 2015年11月18日 作成者: takeuchi

先の河口湖で開催された研究合宿では、興味深い発表が数多くなされた。

公益財団法人・中央教育研究所所長の水沼文平氏の報告を、以下掲載させていただく。

これは、ある教育関係会社の幹部研修において、水沼氏が話された内容とのこと。含蓄のある言葉やフレーズがちりばめられている。

給料や収入以外の「目には見えない三つの報酬」についてお話しします。それは「職業人としての能力を持つてるという報酬」、「優れた仕事を残せるという報酬」、「人間として成長するという報酬」の3つです。給料や収入は言うまでもなく、使い果たせば失われてしまう報酬です。そして、「役職」や「地位」も、その職を辞すれば失われてしまう報酬です。

それでは「職業人としての能力を持つてるという報酬」はどうでしょうか。一人の人間が、永年かけて身に付け、磨いてきた能力は、それほど容易に失われることはありません。しかし、ときとして、技術の革新や仕事の変化のなかで、苦労して身に付けた能力が価値を失ってしまうときがあります。

「優れた仕事を残せるという報酬」はどうでしょうか。もし、その仕事が、建築物や製品などであれば、それは永く失われることがありません。また、その仕事が、形に残らないサービスなどであったとしても、そのサービスに触れた人々の心に永く残ることがあります。しかし、やはり、いつか建築物は壊され、製品も壊れていきます。そして、素晴らしいサービスの記憶も、いつか人々の心から忘れ去られていきます。このことを考えると、「収入」や「地位」という報酬はもとより、「能力」や「仕事」という報酬もまた、「いつか失われる報酬」なのです。

しかし、「人間として成長するという報酬」は「決して失われぬ報酬」です。仕事を通じて、心の世界を広げ、深めていく。仕事を通じて、人間を磨き、高めていく。そうして得られた「成長」という報酬は、我々が生涯を終える日まで、決して失われることのない報酬です。さらに、この「人間成長」という山の頂に向かって登る姿は多くの後輩に見つめられ、決して失われない報酬として、受け継がれていくものなのです。

教育に関わって仕事をしている我々ですから「人間成長」に結び付く学校教育での「真の学力」についても考えてみたいと思います。

日本は長い間「知識・技能」で児童・生徒の能力を図っていました。それがグローバル社会に通用する人材の育成のために「思考・判断・表現」の能力が必要となり世界標準の学力テスト「PISA」に参加するようになりました。文科省が行っている問題Bでは「意欲・関心・態度」が問われています。

しかし「勤勉性、協調性、社会適応力、信頼性、忍耐力、創造性」などの非認知能力は現在の学力調査では計測が困難です。このような能力は人が社会に出て成功する上で最も必要なものであり、学校教育の中での能力の育成が重要となってきます。

次に、グローバル社会・情報化社会において世界に通用する「日本型学力観」について考えてみたいと思います。その学力観の根底に日本人が大事にしてきた「自然への畏敬の念」や「生命の尊重」を置きたいと思います。そこには世界に求められている自然保護、平和、共存などの理念があります。偏差値教育からの脱却、非認知能力を含めた子どもの育成、そして、異文化を理解し優れた国際貢献力を持った人材を育成することが大事だと考えます。

それでは幹部として部下にどう接していくか具体的にお話しします。一方的な通達では部下は育ちません。相互コミュニケーションが取れてこそ部下は管理職の意図するところを理解していきます。また、部下一人ひとりに対する適切な質問を通じてのカウンセリング能力も学習効果を高める力があります。

さらに、部下を動かすには、「率先垂範」「納得」「体験」「褒賞」の四つが必須となります。そのためには、皆さん方の考え方を変え、習慣を変え、品性を変え、生き方さえも変えなければ、部下は心からついて来ないと

いうことを肝に銘じてください。（水沼文平）

参考文献：「仕事の報酬とは何か」著者 田坂広志

日本子ども社会学会第23回大会参加記

投稿日: 2016年6月7日 作成者: takeuchi

日本子ども社会学会第23回大会が、沖縄の琉球大学で、6月4日～5日に開催され、それに参加し、多くの発表を聞く同時に、浜島幸司氏らとデジタル教科書に関する調査のデータの報告をしてきた。

本土から離れた地での開催でありながら、多くの人が参加し、沖縄ならではのことがたくさんあり、有意義な学会であった。

我々の発表レジメは下記。

[\[印刷配布\]【子ども社会学会】2016報告スライド（武内・浜島・谷田川）](#)

公益財団法人中央教育研究所の水沼所長の学会参加記を一部掲載させていただく（中研ニュース6月号より抜粋）

6月4、5日、「日本子ども社会学会第23回大会」が琉球大学で開催されました。会場となった千原キャンパスは沖縄県中頭郡西原町にあり、千原池を中心とした広大なキャンパスに6つの学部があります。構内には環状の片側1車線道路（通称「ループ道路」）があり、信号もいくつかありました。

琉球大学を英語で“University of the Ryukyus”で表記しているので“Ryukyus”と複数形になっている理由を聞いたらかつての琉球はたくさんの島々からなっていたので“s”をつけたということでした。

学会では武内清先生（敬愛大学）、浜島幸司先生（同志社大学）、谷田川ルミ先生（芝浦工業大学）が「デジタル教科書に関する教師と児童・生徒の意識」を発表しました。

これは武内清先生を中心とする中研プロジェクト「主たる教材である教科書の在り方の研究」の調査研究で、平成27年10月上旬に小学校教師1500名、中学校教師1000名、また11月上旬に児童生徒用として小学校13校、中学校13校を対象にアンケート調査を実施、そのデータを処理・分析を行ったものです。報告書は9月下旬に発行予定ですが、今回の学会でその概要を発表しました。

空き時間を利用して「ぐすく（城）めぐり」をしました。うるま市の勝連城（かつれんぐすく）は天空の城そのものでした。最後の日は糸満市にある「ひめゆりの塔」を訪問、彼女らの痛々しい死に戦争の持つ「愚かさ」を再度実感しました。

市内はガジュマル、アダン、フクギ、ソテツなどの緑が生い茂り、ハイビスカス、ブーゲンビリア、カンナなどの花が咲いていました。町中の至るところでフヨウに似た黄色い花を見かけたので沖縄の人聞いたら、沖縄名で「ユウナ（右納）」と呼ぶ花だそうです。

ネットで調べたら「オオハマボウ」でアオイ科の常緑高木とありました。

米軍基地が生んだものでしょう、黒人と混血の人を多く見かけました。ホテルには多くの台湾人観光客がいましたが、大陸の人とは大違いで静かな立ち居振る舞いでした。

元米海兵隊員軍属による女性殺人遺棄の事件があったばかりなのに、訪問中、米兵の酒酔い運転により怪我人が出る事件が起きました。また5日は県議員選挙の投票日にもあたり、翁長知事を支える県政与党が3議席増やし、県議会の過半数を維持しました。

政権与党が本土とは逆さまになっていることに、沖縄県民が抱えている切実な問題、それに真剣に取り組んでいる姿を見ました。

学会前日に沖縄入りしましたが、バケツをひっくり返したような大雨でした。開催日の土日はからりと晴れあがり真夏のような天気、帰りの月曜日はしつととした粉糠雨が降っていました。この天候に似た沖縄の状況に日本人のひとりとしてこれからも注目していきたいと思っています。（水沼文平）